論文の内容の要旨

論文題目： 現代イランにおける地方農村社会の構造変容
——革命･戦争とルースター･シャフルの形成——

氏　名： 鈴木　均

本論文執筆のそもそもの出発点は、筆者が奉職しているアジア経済研究所の 1999 年から 2001 年の海外派遣の時期に遡る。この時の海外派遣では当初からフィールドワークを中心にしたイランの地方農村部の調査を実施し、その結果をやがてモノグラフの形で 1 冊の研究所にすることを意図して計画を立案していた。

本論文は全体として 6 章構成となっており、他に報告の全体的な背景を述べた「序章」と「巻末付表」、「参考文献リスト」が付属している。まず「現代イランの地方における都市化について」と題した第 1 章においては、第 1 に本論文の序論的な議論としてイランの地方農村社会についての先行研究を概観し、併せてそこで描かれているマーレキ･ライーヤト制度（地主小作制度）の実情を紹介した。次に 1979 年のイラン革命後の政治過程と 1999 年の改革期における地方行政制度の改変を跡付け、その後の改革派の退潮と保守化傾向の背後にある地方の動向までを見通した。

さらに公式の人口統計結果を長期的に比較する事により、イランにおける最近 50 年間の都市化傾向が革命以前においては明確に大都市への人口集中を示していたのに対し、革命後は地方農村部重視の政策と対イラク戦争の影響によってむしろ地方における農村部中小都市（ルースター･シャフル）の全国的な形成へと変化したことを示した。このルースター･シャフルこそ本論文において中心的な考察の対象となっているイラン社会の新たな構成要

素である。第 1 章の最後ではフィールドワーク調査の具体的な経過と内容、質問項目、さらに本成果における「社会的事実の確定」に関する問題を扱った。

次に「ルースター・シャフル形成の一般的特徴」と題した第 2 章においては、まず前章で存在を明らかにした「ルースター・シャフル」をその形成要因から 17 の類型に分類し、そのうちの 16 タイプを「狭義のルースター・シャフル」として再定義した。次にルースター・シャフル形成の全国的傾向を項目別に具体的に整理して提示した。その際筆者が主に用いたデータは、筆者がイランにおけるフィールド調査の第一段階において 169 のルースター・シャフルを訪問し、町のショウラー議員などにインタビューを行なった一次情報であり、これを整理・加工したものである。

その際の整理の項目としては、質問票の項目をベースにして町の歴史と交通・流通関係、行政、社会インフラ、産業・経済、水事情関係、人口流動性と社会構成という諸項目を立てた。またルースター・シャフルの諸特徴が全国的傾向として類型別に顕れているのか、或いは地域的な特徴を大きく残しているのかが基本的な関心となったが、特に「水事情」においては地域的な特徴の方がより明確に顕れており、イランにおける社会発展の風土的規定要因としての水の重要性がルースター・シャフルの分析においても改めて確認された。

以上の考察を議論の前提として、第 3 章から第 5 章においては筆者の第二段階におけるフィールドワーク調査の結果を整理することによって、少数の典型的事例におけるより詳細なルースター・シャフルのあり方を提示した。まず第 3 章ではイラン西北部の「東アゼルバイジャン州ミヤーネ周辺における具体相」として、セフィードルード川上流の同じ水系に属するトルキャマンチャーイ、ソウメエ・オリヤー、ヴァランケシュという 3 つのルースター・シャフルを扱った。その結論として、これら 3 つの農村的ルースター・シャフルは似通った文化と経済水準を持ちつつもそれぞれに個性をもっており、地理的条件からしても将来的に統合していくことは考え難いが、数年後に開通予定の鉄道によって競合しつつも新たな都市化への可能性を模索していく事が期待される。

第 4 章ではイラン中央部の「エスファハーン州ザーヤンデルード川流域における具体相」として、ザーヤンデルード川上流域のレンジュ、フーレンジャーン、アーデルガーンの 3 ヵ村（2002 年以降は統合してズィーバーシャフル市となる）、および下流域の農村都市ヴァルザネを考察の対象とした。前者の 3 村はエスファハーン近郊の米作農村として発展し、

また近くにはモバーレケという工場町もある。このように地理的条件に恵まれた 3 村の統合が新市の名称の問題をきっかけに混迷していく有様を、市長の行政手腕に支えられたヴァルザネの事例と比較しつつ検討した。

第５章ではイラン南部の「フーゼスターン州デズフール周辺における具体相」としてシャムサーバード、ガルエ･セイエド、シャハラケ･トウヒード、アンジーラクの 4 つのルースター･シャフルを取り上げた。これらの 4 村は互いに隣接しつつも極端なほどの経済格差を抱えており、革命前から集村化計画が実施された周辺地域の中で唯一現在に至るまで統合が実現していない。とりわけアンジーラクは遊牧民のバフティヤーリー族が革命後に定住した村で、この村の窮状はある意味でイランの地方農村部における革命前後からの激しい社会変化を象徴していると言えるものである。

以上のようなルースター･シャフルの実態に関する帰納的考察の結果として、筆者が結論部（第 6 章）において述べた主旨は以下のようなものである。すなわちイラン革命とその後 8 年間におよんだ対イラク戦争は､イランの地方農村部におけるルースター･シャフル（農村部中小都市）の出現を全国的に促すことになった。それは大枠としては西欧的近代化としての都市化の方向に沿いながらも､「イスラーム革命」の刻印を大きく受けた、極めて個性的で新しい要素を含んだ都市化過程であったと言いうる。